

介護における
「活性化(残存能力の活用)」とは
失われた能力は補い
現有能力は活かすこと

能力とは

残存(現有)能力とは

顕在能力か？
潜在的な能力も残存(現有)能力か？

生活の活性化とは

何を活性化するのか？
身体機能か？ 生活全体か？

能力とは

当事者の意思は

その都度の意思か？
中長期的な意思か？

意思確認の方法は

言語的なコミュニケーションが取れない場合はどうするのか？

「あなたの声が聞きたい」からの学び

1 職業人としての基本姿勢

⇒ 勤勉、努力、目標追求、忍耐
⇒ 支援をし続けていれば必ず新しい発見があり、変化がある。しかし、諦めてしまったら何も発見できないし、変化も起こらない。

プロフェッショナルとしての使命感

1) クライアントを大切にするという基本原則

それは、クライアントや家族の願いに応えることから始まり、クライアントの回復・自立を自分の喜びとするという実践場面での共感につながっている。

「命を救ってもらっても、植物状態では、助けてもらったことにならない」という家族からの医療職への批判

⇒ 専門職として辛かった。

「せめて最小限の意思の疎通ができるようになって、家に連れて帰りたい」

⇒ 「家に連れて帰りたい」という家族の願いに応え、

意識のない人に尊厳ある生を取り戻す働きかけをはじめめる。

2) 自立することに尊厳があるという信念

基礎的な生活行動(普通の生活)の確立

① 起こす・・・寝かせきりよりも座位をとるだけで脳が活性化する。

② 経口摂取(食事を口から摂る)

口から食べることを止めてしまうと、体は食物を取り込むことを忘れてしまう。経管栄養で命をながらえさせることは、生きていても生活していることにはならない。

⇒ 口から食事を摂れることが生活行動自立の最初のステップになる。

③ 入浴(温浴)・・・日中の体温上昇

→ 日中の体温上昇が夜間の熟睡 につながり、深い睡眠の後にはしっかりと覚醒することができ、身体リズムが活性化する。

⇒ 専門職の信念は、クライアントや家族の希望になる。

3)可能性を信じて潜在的な能力を引き出す

①残存機能の確認

視覚、聴覚、温覚、触覚、味覚等の感覚機能

②意思の疎通の技術を開発する。

・サインの確立

基本的な信号(手を握る、瞬き、グウ・チョコキ・パー)

・言葉の確率

高度な信号(言語訓練・挨拶等の日常で使う言葉)

③機能回復を信じて根気よく働きかけ、諦めない。

・声かけを絶やさず、機能活用の機会を創る。

⇒当事者の希望、意欲が引き出される。

・自助具、福祉用具の活用

⇒できない動作、行動ができるようになる。

⇒クライアントの喜びを自分自身の喜びとする。

3 限界と課題

①自己決定の視点からの疑問、葛藤

⇒看護師の理想の押しつけになる危険性はないか？

②何を指して生活支援をするのか……病院の中で完結しているという限界

⇒ケアの継続性(老人病院への転院)

⇒社会との相互関係を通じた自立

⇒人間にとって、本当に尊いことは何なのか？

森さん(看護師)

「一生懸命頑張って」、「今を維持するために頑張るんだぞと自覚して頑張って」

中島さん(クライアント)

「頑張るけど、限界がある」

森さん(看護師)

「限界なの」、「じゃどうすればいい?」、「自分で自覚しなければ辛いことばかりだ」

⇒ その後の看護計画……外出

能力評価と自己決定

能力評価

- ・能力を現状に合わせて評価する
⇒ 可能な動作・行為が活性化する
- ・能力を現実よりも低く評価する
⇒ 可能性・尊厳を奪う
- ・能力を現実よりも高く評価する
⇒ 不可能な動作・行為の強要

能力評価と自己決定

自己決定

- ・利用者の意思に基づいて自立を行う
⇒ 生活が活性化する
- ・利用者の意思を無視して自立支援を行わない
⇒ 生活活性化の機会を奪う
- ・利用者の意思を無視してでも自立支援を行う
⇒

今だと違和感を感じること

- 言葉遣い・・・利用者中心、尊厳、権利擁護の点で問題がある
- 離床時の車椅子・・・抑制がある。

時代によって、人々の間で受け入れられ、共有されている規範がある。